武田流合氣之術

TAKEDA RYU AIKI-NO-JUTSU

武田流合氣之術 史略

「武田流合気之術」は、昔は「相気之術」とも称され、あるいは「武田流合気柔術」とも称され、日本武尊ﾔﾏﾄﾀｹﾙﾉﾐｺﾄ及び御子武田王ﾀｹﾀﾞﾉｵｵｷﾐ・ﾀｹﾀﾞﾉｷﾐを大祖と仰ぎ、新羅三郎源義光を始祖とし、甲斐源氏武田家に秘かに伝えられた武術である。

人皇第十二代景行天皇の御代（景行２７年＝皇紀７５７年＝西暦９７年頃の８月～１２月）、大和朝廷に反抗した九州熊襲（現鹿児島県霧島市国分地区の大隅国姶良郡国分村の隼人城に立て籠もった）の酋長川上梟帥ｶﾜｶﾐﾉﾀｹﾙを討ったのが、景行帝の御子日本武尊（本名は小碓命ｵｳｽﾉﾐｺﾄ）である。此の時に尊が用いられた形が「梟帥固ﾀｹﾙｶﾞﾀﾒ」と称して、逆と締と点穴を同時に用いる極めて効果的な秘技が、武田流宗家伝承の秘技（控え宗家としての証）とされている。
また尊が熟苽（熟した苽）を打ち砕くが如く、梟帥を打ち殺したという、「熟瓜打ちﾎﾞﾁｳﾁ」という独特の打ち方も伝わっている。

↑「日本武尊（小碓命）」（国史画帖 大和櫻、省文社、昭和１０年（1935 年））

新羅三郎源義光（寛徳２年（1045 年）～大治２年（1127 年）１０月２０日没）は、清和源氏源頼義の第三子で、有名な八幡太郎義家（陸奥守兼鎮守府将軍、前九年の役 1051～1062 および後三年の役 1083～1087 で武功を挙げ、武士の棟梁とあがめられた）の弟である。稀にみる武芸の達人で、兄の義家と共に大江匡房ﾏｻﾌｻの門に入り、兵法・武術を学び、また天文・地理・音曲（笙の名手）にまで名をなした、まことに教養の広くかつ深い博才多芸の人であった。この義光が、日本武尊伝来の秘技を、愛宕山の仙人愛鷹の翁（鷹翁）から伝授された（別説に、足柄山にて許されたとある）。

広い教養を身につけた義光は、更に一段と工夫をこらし、後三年の戦に参加してこれを実地に試み、戦死した兵を解屍して関節や骨格の研究をして、逆技と当身を完成させ、更に蜘蛛の糸で小鳥をしっかりと搦みとるのをみて、「ヤワラ」の実理を悟って、

Copyright ⓒ Tsunehisa Shoto Tanemura 2026 All rights reserved.　無断転載厳禁

「合気之術」を完成させたといわれる。
この他に撃刀（太刀打ち）・弓術・馬術を伝え、武田流弓術からは逸見流・日置流・小笠原流・大和流等が派生し、現在に伝えられている。

↑「新羅三郎源義光」（日本櫻より）

新羅三郎義光の子孫は代々、甲斐国の守護に任ぜられ、義清（武田冠者）・清光（逸見冠者）・信義（武田太郎）と続いた。義光の曾孫武田太郎信義の代になって、甲斐国北巨摩郡神山村字武田（山梨県韮崎市神山町武田）に住居を構えて武田姓を名乗り、二十四代信虎に至るまで、この地において勢威を振い、義光の合気の術も秘かに伝わっていた。

永正年間（1504 年～1520 年）に、信虎が国内の反乱を鎮定し、ついに躑躅ヶ崎ﾂﾂｼﾞｶﾞｻｷ（山梨県甲府市古府中町ｺﾌﾁｭｳﾏﾁ）に居館を移して、武田家を再興した。
信虎の子信玄が出るに及んで、武田家は領土を拡張し大いに栄えた。天文十年（1541 年）六月、信玄が２０才の時（今日での満１９歳）に、父信虎を国外に追放した。
追放された信虎は、駿河の今川義元の許に身を寄せ（信玄の姉婿の許）、追放された駿河の地で、側室との間に生れた末子の信友（武田上野介信友・翁斎）に義光伝来の合気之術を伝授した。
戦国時代に甲斐武田地方に勢威を誇った武田家は、勝頼の天目山での敗北と共に滅亡したが（この勝頼の娘姫が種村家を頼って合流した）、信玄の末弟信友に伝えられた合気の秘術は、信友の一子勝千代に伝承された。武田家・今川家の滅亡とともに、流浪の旅にあった信友・勝千代父子は、合気の術に益々その精妙を加えたのである。

勝千代は、後に石田三成の客分となり重用された。関ヶ原の戦に三成が敗れるや、三成の遺志によって筑前（福岡）５２万石の大名黒田長政に迎えられた。
武田勝千代は翁斎と称し、その神妙の秘技は天下随一で、武田流中興の祖として尊敬されている。これが甲斐の武田流と黒田藩との因縁である。この術も黒田長政の要請によって、一子相伝の家法が厳しく守られて来たので、世俗的には全く知られていない。

これが明治の初期から、北九州の憂国の志士の間にひそかに鍛錬され、特に四十一世中村翁吉は非凡の名手で、頭山満翁の許にあって門下の指導にあたり、宮川一貫・内田良平・末永節・大庭一翁等の諸国士を輩出せしめた。
明治大学・外国語学校卒業後、外交官（外務省顧問）であり柔道家（講道館五段）でもあった大庭一翁（本名：武幸）は、第四十二世中村合気斎翁吉の後を継ぎ第四十三世となり、九州は福岡県戸畑市中原（現北九州市）、即ち中原海岸（中井浜）の矢倉山荘（櫓山荘）の道場（武田流矢倉山道場）にあって多くの門人を養成し、更に戦後の昭和２７年に上京し、世田ヶ谷区松原町に聖武殿ｾｲﾌﾞﾃﾞﾝを建設して（佐藤金兵衛が一切合財の面倒を見て招聘した）、新進気鋭の若人を沢山養成した。九州に於ける

Copyright ⓒ Tsunehisa Shoto Tanemura 2026 All rights reserved.　無断転載厳禁

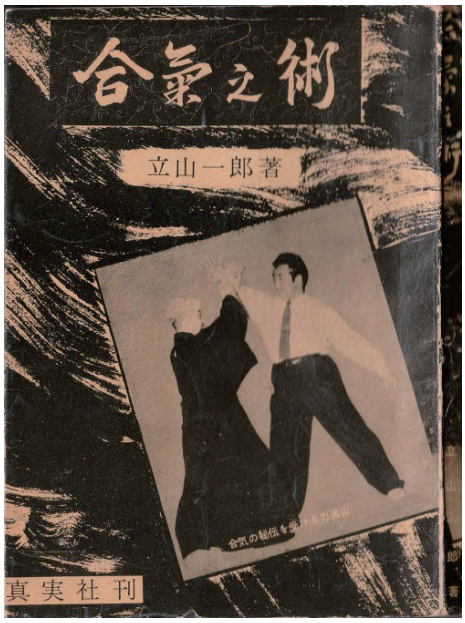
門下生としては、佐藤金兵衛（四十四世）、大庭実（八段・一翁実兄）、田中久雄（七段・一翁友人）、新川功（師範）、原田功（師範・理事）、竹内信義（鬼角斎、師範・六段）、森本一雄（師範代・五段）、岡部勝（師範代・六段）、西津某（師範代・五段）、船本某（五段）、田中六平衛（五段・師範代）、長沢成繁（兌翁、双真道合気柔術、師範代・五段）、船越由浩（五段）、市村（市岡）某（五段・師範代）、水島剣城（福島県公安委員長）、大野性二（他流師範）、大庭剛之（一翁子息・五段）、藤岡幸男（二段）、上野義夫（二段）、中村久（武田流中村派）等があり、東京では山田太郎・山村義孝・映画俳優の東千代介・俳優の高倉健・プロレスラーの力道山（免許）・プロレスラー遠藤幸吉（免許）等々がいた。

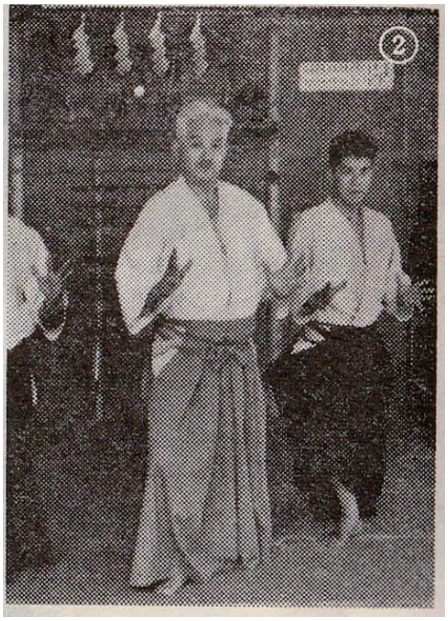
また、四十二世中村合気斎翁吉の高弟には、大庭一翁の他、大庭実・宮川一貫・中野正剛・内田良平・田中久雄・末永節・武田範之などがいた。

なお、四十三世大庭一翁は、近代的な教養を身につけ、各種武道に秀でた人物で、神がかりの多い古武道家の中にあって、特異的ともいうべき存在で、昭和２０年(1945) 秋から武田流合氣之術を一般公開し、その合気の理論的、科学的な解説は近代人を容易に納得させ、その合理的な指導法によって、極めて短期間に門人を上達せしめられた。昭和３４年（1959）１２月、惜しくも循環器病の為（客死との説もある）に波瀾の生涯を閉じられた。

佐藤金兵衛（清明、柔心斎）は、大庭一翁から頼まれて柳生心眼流や大和流などの柔術を教伝し、大庭一翁からは武田流と九鬼神流棒術の教伝を受けた。なお、大庭一翁は、方円流（五代小川保政および六代皆本善之助に師事）や神刀流などの免許も受けていた。

大庭一翁時代の武田流合氣之術（武田流合氣武道）の階級制度は、初傳（初段）・中傳（二段）・上傳（三段）・本傳（四段）・秘傳・奥傳・皆傳（免許皆傳）、師範代（五段）・師範（六段）・大師範、教士・範士、初目録・中目録・上目録・大目録・總目録というものであった。





↑「合氣之術」（立山一郎著・真実社刊）S31.6.1

Copyright ⓒ Tsunehisa Shoto Tanemura 2026 All rights reserved.　無断転載厳禁

佐藤金兵衛は、大庭一翁から奥伝の教導を受けていたある日の夜中、一翁から急に呼び出され、矢倉山道場にて（道場の明かりは消され神前の灯明だけがつけられていた）、『人間何時どうなるか判らんので、控え宗家というものを造っておく。これを知っているのは私とあんただけだ・・・』と言って、武田流宗家伝承の秘技「梟帥固ﾀｹﾙｶﾞﾀﾒ」を密かに伝授された（宗家になるのは巻物でも許状でもなく、この秘技が伝授され、控え宗家の委託を受けたかどうかである：佐藤金兵衛著「柔と拳と道」P119）。

佐藤金兵衛は、「御控え宗家」となっていたが、大庭一翁の死後の一周忌（昭和３５年１２月）において集っていた師範達との会合で、第四十三世大庭一翁から宗家伝の梟帥固を伝授された者は佐藤金兵衛しかいないという事が判明し、この日をもって、武田流合氣之術第四十四世を継承した。

種村恒久匠刀は、平成元年（1989 年）９月２５日および１２月１１日、佐藤金兵衛より、控え宗家の秘傳「梟帥固」を伝授され、控え宗家・第四十五世を許され、翌年の平成２年（1990 年）５月１７日には、「合氣」の極秘文字の直筆色紙を拝受し、同年９月３日にも、改めて鷹の爪・野中の幕・梟帥固のほか必勝法・極意歌などの極秘傳を伝授された。

↑恩師佐藤金兵衛と種村匠刀

↑秘傳を伝授

↑「合氣之術」の佐藤直伝写真掲載秘伝書

↑合氣の極め方極意

Copyright ⓒ Tsunehisa Shoto Tanemura 2026 All rights reserved.　無断転載厳禁

大東流合氣柔術のこと

一方、武田信玄は、隣国会津の国司で盟約のある芦名盛氏あての遺書を、一族の武田土佐守国継（国次）に与え、「勝頼遺戒を破らば芦名にゆけ。」と命じている。
勝頼は父信玄の遺戒を破り、天正元 1573 年六月、織田信長と戦端を開いた。よって武田国継は、天正二 1574 年三月二日、会津に入り、ここに芦名氏の地頭となり、芦名一族として、三浦平八郎盛重の別名を賜わった。

芦名盛氏の死後、国継は元の武田姓（武田土佐守国継）にかえり、長子権左衛門主税は、会津国司の蒲生氏郷・加藤嘉明・加藤明成・保科正之に歴仕して、合気柔術を指南した。

会津藩においては、武田家の合気柔術を域中で五百石以上の武士ならびに奥女中・側近などに御殿術としてひそかに修練させたが、これが「会津の御留技」（御式内）として、明治維新まで伝えられた。そしてそれが武田惣角によって、大東流として一般に公開普及されたのである。

武田惣角は、祖父武田惣右衛門の門弟保科近悳ﾎｼﾅﾁｶﾉﾘ（元会津藩家老西郷頼母ｻｲｺﾞｳﾖﾘﾓ、後に霊山ﾘｮｳｾﾞﾝ神社宮司、明治３６年（1903 年）４月２８日没、享年７４歳）について剣柔の二術を学び免許皆伝を得た。更に日本全国を武者修行し、良師を求めてその指導を受けた。天賦の才能もあって、精妙な技は更に入神の域にまで達し、近世不世出の名人と仰がれている。武田惣角は、一生旅の連続であった。旅の間に各地に多くの門人を残された。山本角義～長尾全祐伝承では、武田惣角は、昭和１８年（1943 年）４月２４日青森の伊東旅館にて、伴っていた最後の門人山本角義に看取られ（死に水をとり）死去、享年８５才であった。なお、武田時宗説では、惣角は、同年同月２５日、青森市浪打町伊藤旅館にて８４歳の生涯を終えたとなっている。

武田惣角の指導法は一風変っていて、一回技をかけて、一回手をとって教えても二度とは教えず、先へ進めたという。このことについては、「良く教えると合気武道などと言って、自分で創始したなどという者も出て来るからナ。」と言っておられたとのこと。また授業料は他流からみるとかなり高価であった。惣角の門人は各地に居るが、主な師範系としては、次の通りである。

武田惣角（第三十五代、溝口姓）
　武田時宗（幼名　宗三郎）
　吉田幸太郎
　植芝盛平（守高・常盛、合気道）―植芝吉祥丸
　佐川幸義（幸太郎）
　細野恒次郎―中島義雄
　堀川幸道
　久　琢磨
　松田敏美（豊作）―山口泰成、奥山龍峰（吉治、八光流）
　山本角義（本名留吉）→佐藤金兵衛 S32(1957).3.吉　教授代理―小佐野淳
　　→長尾全祐　S56(1981).3.3　教授代理→種村匠刀

注記：武田流第二十五世の武田信友の門人武田出雲守義直が、門人大東久之助に伝え、後に大東流合氣術となったとの説あり。（「合氣之術」（立山一郎著・真実社刊）P107）

なお、大庭一翁の実兄（大庭実）は講道館柔道八段で、大東流の武田惣角の親友であり、かつ義兄弟であったとの説あり。

Copyright ⓒ Tsunehisa Shoto Tanemura 2026 All rights reserved.　無断転載厳禁

武田流合気之術代系図

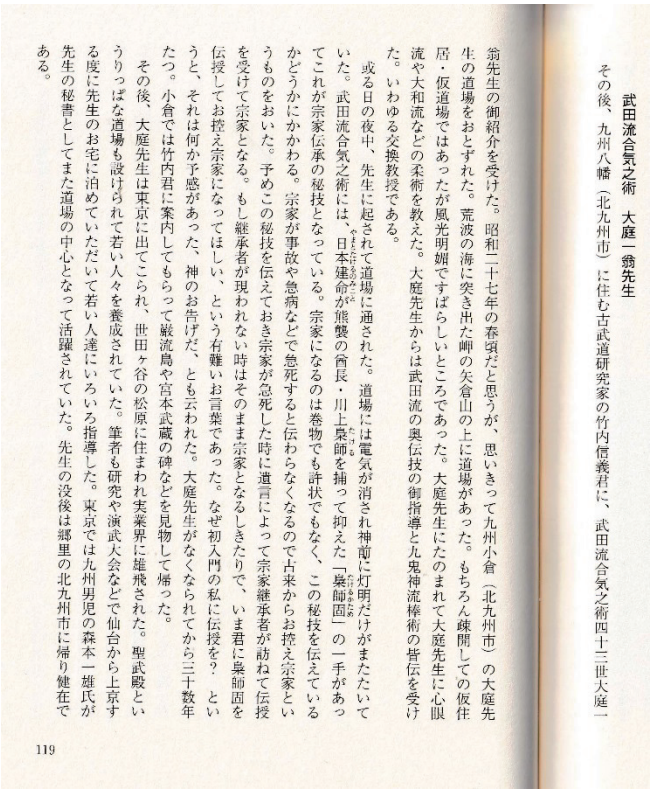
太祖（一世）　**日本武尊（日本武尊・小碓命）**
（太祖二世）　武田王（武田王命）

（※代々宮中へ秘技被護持後伝授、愛鷹翁義光継ぐ。）
（※合氣柔術　貳阡八十八手）

愛鷹之翁（足高翁）
始祖（一世）**新羅三郎義光（源義光）**（大治二 1127 年十月二十日卒八十三才）
二世　**武田義清**（**武田冠者義清**、三男）（久安五 1149 年七月二十二日卒七十五才）
三世　武田**清光**（黒源田、**武田姓名乗る**）（仁安 1168 三年七月八日卒五十九才）
四世　武田信義（太郎信義、武田冠者信義）（文治二 1186 年三月九日卒五十九才）
五世　武田有義
六世　武田信光（大膳太夫五郎信光）（宝治二 1248 年十月二十五日卒八十七才）
七世　武田信政（小太郎信政）（文永二 1265 年正月六日卒八十七才）
八世　武田信長（六郎信長）
九世　武田信時（正応 1289 二年二月九日卒六十九才）
十世　武田政綱
十一世　武田信家
十二世　武田時綱（三郎時綱）（徳治二 1307 年七月三日卒六十三才）
十三世　武田信宗（弥六信宗）（元徳二 1330 年十一月九日卒六十二才）
十四世　武田信武（孫六信武）（康安二 1362 年正月六日卒七十一才）
十五世　武田信成（刑部大輔信成）（応永元 1394 年六月十三日卒）
十六世　武田信春（信理亮信春）
十七世　武田**信満**（安芸守）
十八世　武田信光
十九世　武田春信
二十世　武田信重（甲斐太郎信重）（宝徳二 1450 年十一月二十四日卒）
二十一世　武田信守
二十二世　武田信昌
二十三世　武田信縄（五郎武縄）（永正四 1507 年二月十四日卒）
二十四世　**武田信虎**（徳秀斎、天正二 1574 年三月五日卒八十一才）
二十五世　武田**信友**（九郎信友翁斎、上野介信友、**筑前黒田藩**）（文禄二 1593 年卒）
二十六世　武田勝千代（翁斎、石田三成→黒田長政・黒田藩）（慶長十三 1608 年卒）
二十七世　武田信勝（武王丸、武翁）（寛永十 1633 年卒）
二十八世　武田信隆（明暦三年 1657 卒）
二十九世　武田隆義（寛文二 1662 年卒）
三十世　武田清方（二郎清方）（延宝四 1676 年卒）
三十一世　武田信秀（五郎信秀、五郎信秋）（元禄七 1694 年卒）
三十二世　武田光春（正徳五 1715 年卒）
三十三世　武田信忠（信忠久幹）（享保十八 1733 年卒）
三十四世　武田光月尼（照代光月尼）（元文四 1739 年卒）
三十五世　武田光伸（久世光伸）（宝暦二 1752 年卒）

Copyright ⓒ Tsunehisa Shoto Tanemura 2026 All rights reserved.　無断転載厳禁

三十六世　武田隆治（安永六 1777 年卒）
三十七世　武田正勝（大原正勝）（寛政二 1790 年卒）
三十八世　武田光政（大原光政）（文化十三 1816 年卒）
三十九世　武田正昭（天保八 1837 年卒）
四十世　　武田守之助（翁涯）（安政二 1855 年卒）
四十一世　武田忠勝（翁堂）（明治十九 1886 年卒）
四十二世　**中村翁吉**（合気斎翁吉、中村応吉、武田応吉）（昭和十年 1935 卒）
四十三世　**大庭一翁**（合氣斎一翁、翁之、武幸）（昭和三十四 1959 年十二月没）
四十四世　**佐藤金兵衛清明**（平成十一 1999 年一月二十一日没）→小佐野　淳
四十五世　**種村恒久匠刀**



武田流合気之術　大庭一翁先生

その後、九州八幡（北九州市）に住む古武道研究家の竹内信義君に、武田流合気之術四十三世大庭一翁先生の御紹介を受けた。昭和二十七年の春頃だと思うが、思いきって九州小倉（北九州市）の大庭先生の道場をおとずれた。荒波の海に突き出た岬の矢倉山の上に道場があった。もちろん疎開しての仮住居・仮道場ではあったが風光明媚ですばらしいところであった。大庭先生にたのまれて大庭先生に心眼流や大和流などの柔術を教えた。大庭先生からは武田流の奥伝技の御指導と九鬼神流棒術の皆伝を受けた。いわゆる交換教授である。

或る日の夜中、先生に起されて道場に通された。道場には電気が消され神前に灯明だけがまたたいていた。武田流合気之術には、日本建命（やまとたけるのみこと）が熊襲の酋長・川上梟師（かわかみたける）を捕って抑えた「梟師固」の一手があってこれが宗家伝承の秘技となっている。宗家になるのは巻物でも評状でもなく、この秘技を伝えているかどうかにかかわる。宗家が事故や急病などで急死すると伝わらなくなるので占来からお控え宗家というものをおいた。予めこの秘技を伝えておき宗家が急死した時に遺言によって宗家継承者が訪ねて伝授を受けて宗家となる。もし継承者が現われない時はそのまま宗家となるしきたりで、いま君に梟師固を伝授してお控え宗家になってほしい、という有難いお言葉であった。なぜ初入門の私に伝授を？　というと、それは何か予感があった、神のお告げだ、とも云われた。大庭先生がなくなられてから三十数年たつ。小倉では竹内君に案内してもらって巌流島や宮本武蔵の碑などを見物して帰った。

その後、大庭先生は東京に出てこられ、世田ヶ谷の松原に住まわれ実業界に雄飛された。聖武殿というりっぱな道場も設けられて若い人々を養成されていた。筆者も研究や演武大会などで仙台から上京する度に先生のお宅に泊めていただいて若い人達にいろいろ指導した。東京では九州男児の森本一雄氏が先生の秘書としてまた道場の中心となって活躍されていた。先生の没後は郷里の北九州市に帰り健在である。

119

↑「柔と拳と道」（佐藤金兵衛著）

↑日本武尊（大和櫻）

参考文献

・「武道春秋」二、三月合併号（武道タイムス社）（武田流・大東流合気之術：佐藤金兵衛）S41.3.1
・「柔と拳と道」（佐藤金兵衛著、創栄出版社、H3.3.15）「武田流合氣之術（大庭一翁先生）」（P118~P119,P156~P158）
・「合氣之術」（立山一郎著・真実社刊）S31.6.1
・「武芸帖」第３号（昭和３８、武芸帖社）、「武田流合氣柔術真髄」（竹内鬼角斎）
・「双真道合気柔術」伝書等（長澤成繁）
・「武芸流派大辞典」（綿谷雪・山田忠史編著）新人物往来社 S44.5.15
・「武芸流派大辞典」（綿谷雪・山田忠史編著）東京コピイ出版部 S53.12.10
・竹内信義（鬼角斎）から佐藤金兵衛への書簡、および種村匠刀への書簡類

Copyright ⓒ Tsunehisa Shoto Tanemura 2026 All rights reserved.　無断転載厳禁